

まず個人的な話をさせて下さい。

私は長い間、アメリカのフィラデルフィアの街で日本人教会の牧師をしてきました。数年に一度は日本に伝道旅行をしていました。日本伝道旅行のきっかけは、フィラデルフィアの街でクリスチャンになって日本に帰って行った者たちを訪問するのが目的で、彼らの属している教会を訪問しては、そこで講演したり祈ったりして、主の祝福を体験してきました。日本キリスト教団やバプテスト、同盟や福音派の単立教会、ペンテコステ派の教会からカトリック教会まで、様々な教派で主の恵みを証してきました。私自身、米国プレスビテリアン教会の牧師でしたから、各地の教会が聖霊の刷新を体験するのを見てどんなによろこんだか分かりません。

80年代、日本訪問をするたびに、うねるように来る聖霊の流れを感じて、「これは近い将来、日本に聖霊の大傾注が起こるぞ」と予感するものがありました。

そして1989年、日本訪問をした時、「ついにその時が来た」と実感しました。何も私の伝道が聖霊の到来をもたらしたというわけではありません。たくさんの人々が長い間祈ってきた聖霊の火が燃えだし、天の窓がついに開かれた、というのが実感です。多くの先達が汗して蒔(ま)いた種を、私たちが刈り取らせてもらっている。それが実感です。

とにかく1989年の日本伝道は、私の伝道生涯の中でも画期的なものとなりました。日本各地、北海道から九州まで飛び回ったのですが、最後のスケジュールは学園都市つくばでした。この時、西宮から美津子さんに来てもらい、一緒にたくさんの人たちを祈りました。

教会に行ったことがなければ聖書も読んだことのない美津子さんが、アメリカの地で聖霊に打たれる「白いハト」のドラマティックな体験をしたのが1987年の12月3日。この時は、まだ一年と少ししか経っていない「ベイビー」だったのですが、何も知らない彼女を通して流れる聖霊の流れのすさまじさに私はびっくりしました。しかし、何よりも私が驚いたのは、この人の歩んでいる十字架の道でした。にこやかに笑い、一見何の心配もないように見えるこの人が、次々と肉をそぎとられ、家族も、そして自分をも十字架に釘付けにされているのを見て、キリストの十字架のすさまじさに私は圧倒されました。

つくばから飛火した聖霊の火は、その後、福岡に東京に、各地に燃え移りました。

この後、私はすぐアメリカに向かったのですが、飛行機の中で主に感謝していました。2ヶ月の伝道旅行の間、数百名の者がキリストを受け入れ、たくさんの人たちが主のいやしを受けました。これほどの聖霊の傾注を見たことはなかったし、私はただ主に感謝していたのです。

ところが飛行機の窓から白雲を見ていると、ふしぎなことに言い知れない悲しみが押し寄せて来ます。ひしひしと迫り来る悲しみ。日本伝道が成功したとよろこんでいる私の思いとは裏腹に、主の悲しみしか来ないのです。

主よ、この悲しみは何なのですか。

お前は 少しの魂が救われたと言っては よろこんでいる
しかし わたしの民は飼う者のない羊のように さまよっているではないか
傷つき痛んでいる羊たち お前はこれをどう見るのか

この時から祈り始めました。

国際電話で美津子さんと一緒に祈っていた時、私たちに示された幻がありました。右側に柵が見え、羊の姿が見えます。あまり多くいません。柵の外には、膨大な数の羊がいるのです。近寄って見ると、どの羊

も傷だらけ、そして羊たちはどこに行っているのか分からず、右往左往しています。そして、主が言われたのです。

お前たちは柵の外へ行け
飼う者のない羊たちのところへ行け
わたしの民に
永遠のいのちと愛を携えて行け

私たちは深く感動しました。

でも、私たちに何ができるというのでしょうか。主は柵の外へ行けと言われるが、どのようにして膨大な数の羊たちのところへ行くことができるのだろうか。「子羊の群れ」というネーミングはこの時なされましたが、幻はあっても方法が分からない。

私は当時、フィラデルフィアの日本人教会の牧師として牧会に満足していたし、50歳にならんとしていましたから、もう未知の冒険はしたくなかったのですが、主の願いは日々強まるばかりです。

そして徐々に分かってきたのは、私が長年フィラデルフィアの地でしてきた「家の教会」のアイデアでした。初期のうちは教会堂も組織もなく、いろいろな方の家での家庭集会でした。礼拝の形式もなく、ただ主を賛美し、聖書を読み、祈り合う集いでした。キリストの愛は信頼するにたるもの。十字架の贖いの愛を信じ、説くだけで次々と人々はキリストに來ました。フィラデルフィアは日本から來た大学関係の学者家族がいちばん多かったのですが、一人が救われると口コミで友達に伝わって行く。家の教会ですからカタチばらず本当の意味での交わりをもつことができます。祈りは具体的に、そして心ゆくまで賛美ができます。

私一人が伝道できる範囲は少ししかない。しかし、このような家の教会を、賛美の礼拝を、各々が自分の家とするなら、救われる人々の数は増えてゆくにちがいない。数が問題ではないが、十字架と復活の主を拝し賛美するなら羊が集まらないはずがない。羊飼いは主イエス・キリスト。この方の愛を信じ、この方を賛美するだけでよい。

1991年の中頃、私は長年勤めたフィラデルフィア日本人教会を辞任し、子羊の群れの伝道に専念するようになりました。組織も金もなく、私の友達の牧師たちも、長年気心を知った友達も、ほとんど皆反対しました。既成教会の外で、どこの援助もなしにやるのは理想論に過ぎず、無謀だと言うのです。その中には既成教会に波風を立ててほしくないとはっきり言う者もありました。今までのように私がフィラデルフィアの教会の牧師として、各教会を訪問し、聖霊の管として働けばよいではないかという善意の忠告もありました。しかし、主の時が来ているという確信は動きませんでした。新しいワインは新しい皮袋に入れられねばならない。

子羊の群れは、ただ幻の示しがあったからできたものではありません。幻はたしかにきっかけにはなりましたが、柵の外の羊を救いたいという主の切なる願いがあったから存在するに至ったのです。

子羊の群れは賛美の群れであるというのが、私たちのはじめからの願いでした。いやし、インナーヒーリング、預言や異言など様々な奇跡は起きますが、これらの賜物はいわば付録のようなもの。本体はキリストの愛です。この方の愛だけでよい、という信仰に立つものです。十字架に死に、3日目によみがえった方キリストを賛美する群れであります。

賛美のただ中にいます主が、賛美の中でひとりひとりに愛を注いで下さる。賛美するたびに、十字架に死んだ私たちの古い人が死んでいく体験をするでしょう。子羊の群れは、新しい教派が一つ生まれたというわけではありません。主を賛美し、主の愛だけで十分であるとする新しい群れ、新しい皮袋です。